

小柳康子先生ご退職に寄せて

遠藤 花子

小柳先生には一言では言い尽くせないほどお世話になりました。大学から大学院、留学中、英文学科助教在職中、そして現在に至るまで、私の様々な局面に先生がいらっしゃるいました。今までご親切にして頂いたことに心より感謝申し上げます。特に大学院2年生の時の授業は1対1で受けさせて頂き、この上ない贅沢な時間だったと改めて思い返しています。大学院では2年間に渡り、原書のペーパーバック2冊を読破しましたが、必死でついていったことが思い出されます。しかし、2冊読みこなしたことは、その後留学した時をはじめとして、様々な場でかなりの自信となりました。

助教在職中にいつも優しく声をかけて頂いたことも忘れられません。小柳先生はローマン・ブリテンから現代イギリス文学に至るまで（何と2000年以上！）の幅広い学識をお持ちです。その中でも特にルネサンス時代の女性文学にご造詣が深く、私が助教をしていた時には日野の研究室でよくお説を伺いました。家庭の医学について勉強していた私には、料理に関することにご堪能でいらっしゃる先生と専門分野が重なることもあり、情報交換をする時間が本当に嬉しく、楽しかったのを覚えています。17世紀の女性たちがバラの研究をしていたこと、バラ水が病気治療に使われていたことなど、バラをこよなく愛する先生のお話を拝聴することができたことは貴重な財産となっています。小柳先生は能楽にも精通していらっしゃるのです。私が「能とシェイクスピア」についてのエッセイを書いていた時に、大変ためになるアドバイスを下さったのも懐かしく思い出されます。

また、小柳先生の研究室からは、よく学生と話をする声が聞こえていました。遅くまで卒業論文の指導や面談をされているお姿に、学者としてだけでなく、教育者としての先生の素晴らしさを身近に感じました。

長年に渡り、本当にありがとうございました。